

第13回 災害と報道～まとめ

07年1月16日

毎日新聞 池田 昭

1 あす阪神大震災から12年

- ・ 1冊のスクラップブックに見る時の流れ
- ・ 犠牲者6434人の重みと今も続く「孤独死」
- ・ 「伝わるように伝える」難しさ

2 新聞記者として

- ・ 現場主義（「鳥の目」「虫の目」）
- ・ 「寄り添う」報道 「どうする」報道

3 自然災害取材から世界の子ども救援（難民救済）へ

- ・ 四半世紀に及ぶキャンペーン
- ・ 「出前授業」の展開と教材ビデオ「今、子どもたちは」の作成

<追加>

ネット時代のメディア～信頼性の確保をめざして

- Q1・ネットユーザーの情報発信がひろがるなか、掲示板への書き込みやブロガーの匿名性をどう思うか。
- Q2・ネットの法的、社会的な規制をどこまでかけるべきか。
- Q3・小・中・高校生など子どものネット利用を規制すべきか。
- Q4・ネットの情報をどの程度信頼しているか。また、ネット社会での情報操作の可能性をどう考えるか。
- Q5・オンラインゲームなど単一分野にとどまらず、今春からサービスを始める「セカンドライフ」のようなネット上に仮想社会をつくる動きについて、どう考えるか。

以上

リアペへの感想

毎日新聞

池田 昭

皆さんと同じ学生のころ、林達夫の著作東にはまっていました。林は自由思想家で、日本の百科全書証のパイオニアでした。時代を見据え、先見性に富んだ評論は声高にならないように抑制を利かせながら、毅然としたものでした。林達夫の世界に触れるなかで、「達意の文章」を書く覚悟の難しさを知りました。林はジャーナリストの先達でもあったのです。

最終講義で取り上げた「伝わるように伝える」という言葉に、多くの皆さんが敏感に反応してくれたことに、僕も一定の達成感を覚えました。この言葉は21世紀を前に2000年1月5日の毎日新聞大阪本社発行の夕刊インタビューで舞台美術家の妹尾河童氏が語ったものです。自らの戦争体験をもとに、ただ語るだけでは何も伝わらない、伝えたつもりは自己満足にすぎず、戦争を止めることなどできない、伝わるように伝える責任があるんだ、という壮絶な決意です。「達意」の重要性はジャーナリズムの世界だけでなく、皆さんの日常に普遍化できるものです。

ネット時代になっても、新聞のプリンシプルは変わりません。現場に徹し、事実（ファクト）に愚直なまでにこだわる姿勢です。それが新聞の真骨頂であり、そこから始まるのです。

最後に、皆さんと出会えたことに感謝します。